須賀川市教育研修センター・教育支援センターだより
「　み　ち　」
第142号
令和６年１月１５日 発行

あけましておめでとうございます。令和６年が始まりました！

　あけましておめでとうございます。令和６年は辰年です。動物に当てはめると「龍」ですが、十二支の中で唯一想像上の動物です。「龍」は隆盛や権力の象徴とされ、縁起の良い生き物で、古くから多くの画家が龍の絵を描いています。江戸時代の浮世絵師である葛飾北斎は90歳のときに「富士越龍図」という龍が天に昇っていく絵を描きました。今年は、この龍のように、さまざまなことが上り調子になることを願っています。

　教育研修センター・教育支援センターでは、今年度の振り返りを行い、来年度に向けての準備を行っています。アドバイザー訪問をはじめ、セミナー研修、ジャンプアップ研修、教育支援相談、カウンセリング等の在り方を検討し、子ども達や先生方のために少しでも改善していきたいと思っています。これからもよろしくお願いいたします。

話すことよりも聴くことが先

　学校訪問をさせていただき、廊下を歩いていると、遠くから先生の大きな声が聞こえてくることがあります。先生が子ども達になんとか教えようとがんばっている姿です。しかし、そんなときは、子ども達が「学び」から遠ざかっているようなことが多いように感じます。反対に、先生が子ども達に寄り添い、真摯に子どもの声を聴いている授業では、子ども達は「学び」に夢中になっていることが多いのではないかと思います。協同的な学びに取り組んでいる石井順治氏の著書に、次のような文章があります。

　教師は、常に、どのように話すかを意識している。どう発問すればよいか、どう説明すればよいか、子どもたちをどう諭せばよいかといったように。子どもを育て教え導くのが仕事なのだから、それは当然のことである。しかし、その職業意識が、総じて教師を多弁にする。しっかりと理解させたいという熱意を抱けば抱くほど、あれもこれもとくどくなり、それを何度も繰り返すことになってしまう。

　学ぶのは子どもである。子どもにどういう考えが生まれているか。どこに困難を感じているか、それを一人ひとりにおいてとらえなければ子どもの学びを深めることができない。教えることに夢中になると、そういう当たり前のことに気がいかなくなる。そして、子どもの事実に目も耳も向かなくなる。

　優れた教師は「聴き上手」である。子どもの考えを「待ち」「受けとめ」、そして生まれた気づきから子どもの「探究」を引き出そうとしている。「主体的・対話的で深い学び」の実現に必要なのは、「弁舌巧みに話す教師」ではなく「子どもの言葉を聴ける教師」であり、それをもとに「子どもの学びを促進できる教師」なのだ。

　饒舌さは教師の職業病かもしれない。言葉を少なくし、子どもの言葉に耳を傾ける。その意識をもたない限り、子どもの学びを支えることができない。どう話すかを急いではならないのだ。

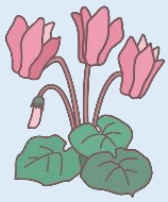
　　石井順治著「『学び合う学び』を生きる」（ぎょうせい）から

「聴く」ことのMI　《コラム No.06》

　すべての子どもに学びを保障するための教師の第一のミッションは「聴く」ことです。NHK ETV特集「二十八の瞳」で学び合う教室の姿を披露した古屋先生に、珠玉の著書があります。

　　古屋和久著「『学び合う教室文化』をすべての教室に」世織書房

　学びは「聴く」ことからはじまります。古屋先生は、子どもたちに「聴き方」をていねいに、そしてしっかり指導します。本の中の「話の聴き方」を抜粋してみます。



1. 話をしている人の方を向く。(あたりまえの聴き方)
2. 聴きながら、心の中で「おしゃべり」をする。
　・「どこでそう考えたのだろう。」・「だれの考えとにているだろう。」
　・「自分の考えとくらべてどうだろう。」
3. 聴きながら「わからない」ことをみつける。
　・その人の考えをもっとわかるために「わからない」ことを見つけ、聴いたらすぐに質問する。
4. 聴いたあと、話の内容を人に伝えることができる。
　・「〇〇さんの話を説明して」と言われた時、自分の言葉で説明できるようにしておく。
　・自分の言葉で説明できないのは「わかっていない」ということ。
　・「もう一回言って」と自分で説明できるまで説明してもらう。
5. 聴いたあと、その話について感想が言える。
　・授業の中で「今の〇〇さんの考えについてどう思う?」と聞かれた時に話ができる。
6. 仲間が言葉につまった時、いっしょに考えたり、そのつづきを想像する。
　・何もしないで待つな! 自分が話しているつもりで、いっしょに言葉を考える。
7. 仲間から話を引き出す努力をする。

　本市でも、ある小学校の先生がこの本に学んで、そして自分の工夫も加えてすばらしい「聴き合う」クラスを育てています。(その工夫がとても素敵なのですが、それはいずれまた。)

　そしてそう、「聴く子どもを育てる」一番は「教師が聴くこと」です。

　教師の一番のミッションは「子どもを『聴く』」ことです。

学校をリ・デザインする～教育課程編成に向けて～

　令和５年度も残すところ２か月あまりとなりました。各学校では来年度の教育課程編成のため会議が開かれ、忙しい時期となっていると思います。毎年、教育課程編成会議を各学校で実施しますが、果たして、どこまでカリキュラム・マネジメントを意識して検討しているでしょうか。「子どものたちの姿や地域の現状等」をどのように把握しているでしょうか。社会が急激に変化していく中で、子ども達の姿も大きく変わってきています。コロナ禍もあり、これから子ども達に力を付けさせたいこともあると思います。例年通りと安易に決めるのではなく、しっかりと子ども達を見つめ、学校グランドデザインをリ・デザインして、来年度の教育課程を編成したいものです。

　教育課程については、「令和５年度　福島県小・中学校教育課程　研究協議会資料」に「育成を目指す資質・能力」「各学校におけるカリキュラム・マネジメントの充実」「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」等が記載してありますので、ぜひ参考にしていただければと思います。その中に、＜カリキュラム・マネジメントの３つの側面＞が以下のように書かれています。

①　各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校の教育目標を踏まえた教科横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育内容を組織的に配列していく。

②　教育内容の質の向上に向けて、子どもたちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立する。

③　教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源を含めて活用しながら効果的に組み合わせる。